2003年12月20日　キリスト教研究所／明治学院歴史資料館共催公開シンポジウム

「ヘボン・シンポジウム」

中島　耕二

クリスマスも近い2003年12月20日（土）午前10時から午後2時まで、白金校舎92会議室で頭書のシンポジウムが開催された。参加者は30名。

今回のシンポジウムは、2003年のヘボン塾開設140周年に因んで出版された、原豊氏の『ヘボン塾につらなる人々』（明治学院サービス）と村上文昭氏の『ヘボン物語』（教文館）を取り上げ、大西晴樹経済学部教授の司会により、第1部及び第2部として、それぞれの著者をパネリストに、コメンテーターに筆者及び佐々木晃氏（キリスト教研究所協力研究員）、更に第3部として出席者を交えての質疑応答という形式で行われた。特に第3部ではヘボンの広範にわたる宣教活動に対し、それぞれの専門分野からの質疑応答が交わされ、参加者全員が新たな「ヘボン」を知る良い機会となった。

第1部の原豊氏（明治学院歴史資料館）は、「ヘボン塾について言及するためには、ヘボンその人を語らなくてはならない」として、著書『ヘボン塾につらなる人々』の「序章　ヘボン塾の成り立ち　ヘボン博士夫妻の生涯とヘボン塾」のコピーをテキストに、ヘボンの生い立ちから、夫妻の結婚、東洋伝道、アメリカ帰国後の病院経営、日本の神奈川上陸、ヘボン塾の開始そして1887（明治20）年の明治学院成立までを、ヘボンの一途なまでの奉仕の精神を中心に発表された。1875（明治8）年にヘボン塾はジョン・C.バラに引き継がれたが、バラも良くヘボン夫妻の精神を受け継ぎ、ヘボン塾・バラ学校として一貫した教育が見られた。その後、バラ学校は築地に移転し築地大学校、東京一致英和学校更に白金に移り明治学院の普通学部へと拡張、発展を遂げたが、ヘボンの精神は伝統として引き継がれた。それは原氏が発表の最後及び著書の中で述べた、次の言葉から証明されよう。

—『ヘボン塾につらなる人々』の登場人物は、同窓生の島崎藤村が作詞した『明治学院校歌』の中に、もろともに遠く望みておのがじし道を開かむ、霄あらば霄を窮めむ壤あらば壤にも活きむ　とあるように、逆境にも負けず、おのがじし道を開拓して行った人々である。そして、どこかしらキリスト教精神を身に付け、他人に対する思いやりのある人々だったといえよう。—

第2部の村上文昭氏（関東学院大学教授）は従来の賛美一辺倒のヘボン像に対して、今回の著作を執筆する過程で発見できた「人間ヘボン」を、多くの事例とエピソードを交えて発表された。中でも英字紙「ノース・チャイナ・ヘラルド」（1897年3月19日付）の記事発見が、著者の本書執筆を励ましたという言葉は大いに出席者の共感を得た。ヘボンは33年の宣教師活動を終え日本を去るにあたって、親しい友人に次のように漏らしたという。

「人々の助けになろうと努め、私財と、生涯で最良の時期を費やしたあげく、私はアメリカに帰ろうとしています。だがその人々の間に真の誠実な友人をほとんど得ることができなかったという悲しい気持ちを抱いたまま、私は去るのです」。

また村上氏はヘボンの教育者としての姿勢にも触れ、夫妻が静養のための旅行や『和英語林集成』の印刷のため、たびたび日本を離れ、その都度ヘボン塾の授業を中断したり或いは他の宣教師に任せたりしていたことは、ある意味で教育に無責任であったと指摘された。もう一点、ヘボンの召天の日、明治学院

寄宿舎のヘボン館が同時刻に炎上したという「神秘」も、実際には日時にズレがあったことを史料によって証明された。これらは村上氏が君子ヘボンを「人間ヘボン」として捉え直し、かつその必要性を我々に示唆されたものと受け止められた。

第 3 部では中国におけるミッション系私塾の誕生の経緯、日本の長老教会の伝統、ヘボンの『和英語林集成』に関連し岸田吟香の役割、その他それぞれを専門として研究されている出席者から質疑及び意見を戴き熱い討議が交わされた。

ヘボン研究はグリフィスや高谷道男の著作によって、今後の研究に余地なしとの感を一般に与えてきたが、今回のヘボン・シンポジウムを通じて「まだまだ裾野は広い」という印象を強く受けた。今後も、キリスト教研究所や明治学院歴史資料館が今回のようなヘボン研究の機会を提供し、一人でも多くのヘボン研究家をうんでいくことが、これからの「明治学院」のアイデンティティーを増すことにつながって行くことと思う。

（なかじま　こうじ
キリスト教研究所協力研究員）

左から佐々木氏、中島氏、村上氏、原氏